

眼を閉じて With Eyes Closed

林 亨
Toru HAYASHI



眼を閉じて (たをやかさのかたち)
麻紙・木製パネル・ミクストメディア 40cm×25cm
2006年



目を閉じて（あはれさのかたち）
麻紙・木製パネル・ミクストメディア 40cm×25cm
2006年



眼を閉じて（をかしさのかたち）
麻紙・木製パネル・ミクストメディア 40cm×25cm
2006年

「眼を閉じて」シリーズ制作ノート2006

◎私の制作のテーマは、大きく言うと「絵画の絵画性」の追求といえる。理論的なアプローチからのものでなく、作家・作品研究を通してその「絵画性」を考え、自分の制作にいかにかにかかすか考えるためのテーマ設定である。キーワードは「平面化（性）－抽象化（性）－物体化（性）」という絵画のモダニズムの一つの典型的な流れを指す言説である。これは、おそらく藤枝晃雄が何かの評論文の中で言ったものを引用したものだと思うが、グリーンバーグの著作とともに、その藤枝が書いた「現代美術の展開」は学生時代、私のバイブルだった。それについて友人や教員と様々なやりとりをしたことが、現在の問題意識を形作る礎になっている。その「絵画性」の流れのなかで、現在、絵画における「社会性」「時間性」「空間性」そして「イメージ」といった新たなキーワードを中心に考えながら制作している。

◎「イメージ」の問題は、とても切実な問題として常に考えている。「フォーマリズム」は「反イリュージョン」を旨としたという言説もあるが、私は必ずしもそう思わない。初期のフランク・ステラ、桑山忠明、そしてドナルド・ジャッドを見たときは今までに見たことがないような不思議な「イリュージョン」に震えた記憶がある。とても豊かな「イメージ」を感じたからだ。「イメージ」をどう捉えるかによるが、絵画の物体化が許容される過程で、大きさはもちろんのこと、材質や厚みからも「イメージ」は発せられるし、おそらく作家は、絵の具の粒子から、額がある場合はもちろんそれも含めて作品全体に、あらゆるレベルで「イメージ」を意識し表出しようとしていると考えられる。しかも、今の自作に関して言うと、過去に極力排除しようとした表象的な「イメージ」を表現したいという衝動に駆られている。そして、もう一つ、学生時代に過剰に意識した当時の主流派的「絵画」への最たる攻撃の武器であった「物語（性）」あるいは「ストーリーテラー」の問題に関しては、これからの新しい絵画表現の重大な要素になりつつあるようだ。そのようにいうと、私の作品が「材（料）重視のストイックな作品」と捉えられる危険性を感じる。私は、「ストイックさ」が優れた芸術の条件でも現代アートの条件とも思っていないが、そう捉えられてしまう脆弱さがまだ残っているようだ。